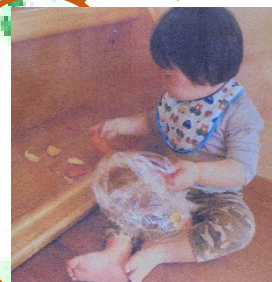


研 究 主 題

科学する心を育てる

～育ちを繋いで気付きを広げる～

気付きに着目して



社会福祉法人 長尾会

第2長尾保育園

目 次

はじめに	P1
0 歳児「いないいないばあ！って面白いね！」（平成 30 年度）	P2
0 歳児「みかんの皮っていい匂い！」（平成 29 年度）	P3
1 歳児「出てくると思ったのに・・・あれ？不思議」（平成 30 年度）	P4
1 歳児「僕がお母さん」「お店屋さんになる！」（平成 29 年度）	P5
2 歳児「おからあそび」（平成 30 年度）	P6
2 歳児「色んなお仕事をやってみよう！」（平成 29 年度）	P7
3 歳児「ほら！テントウムシ！」（平成 30 年度）	P8
4 歳児「水の色が変わった！ ～いろいろな色の氷や水を作りたい～」（平成 29 年度）	P12
5 歳児「恐竜はこんなんやねんで ～イメージを形にしていくな楽しさを感じる～」	P14
総合的な考察	P17

研 究 代 表

幼児チーフ

武 岡 順 子

執 筆 者

主 任

岡 山 愉 子

1 はじめに

大阪府枚方市にある当園は、田んぼや畑、川があり、鷺や日本カメの歩く姿をよく目にする。自然を身近に感じ、理念に基づき五感を感じ、豊かな感性を育む保育を目指し、保育環境・保育者間の対話・記録の作成を行ってきた。

科学する心＜不思議・発見・探究心＞に取り組み、今年で7年目になるが、取り組む中でユニークな遊びや、不思議・発見・探究心に至るまでの根本には「6つの気づき」があるのではないかと気づきの木を子ども達と振り返りながら作った。さらに6年目には、「気づき」の根本には感性があり、その感性は0歳から育まれているのではないかと考え、「子ども主体な保育とそのあそびの継続」と題し、科学ノートを用いて、エピソードやクラスの育ちなど写真とともに記録し、「あそびの継続」を目指してきた。

今年度は、日々の遊びを子ども達と振り返りながら、6つの気づきに再度着目した。毎月の職員会議では、KJ法を用いて、クラスの遊びをウェブ化し、遊びの見通しと場面場面において、保育者はどんな言葉かけが必要か？また、どんな見守り・受容が必要かなど話し合ってきた。今までは、クラス担任と主任間で月案の話し合いを通して話をしてきたが、今年度より全クラス担任で各クラスの遊びを1つテーマに決めて、話し合ってきたことで、各クラスの遊びを共通理解することが出来ること。そして、色んな工夫や思い付きなど、1年目の職員からベテラン職員まで様々な意見を出し合えることが、今年の今回の論文作成にあたり、子どもたちが遊びを探究していくには、6つの気づきの他に保育の振り返りを通して友だちとの違いや一緒に気付くことなど、が探究するプロセスにあるのではないかと考え、また、6つの気づきを細かく分類分けをして時系列にすると、子どもの実態と合って理解しやすくなった。そのため、各クラスエピソードには、①～⑧まで気づきを追加し、色分けを行い、下線で表している。（8つの新たな気づきは下記の図1に示している）

さらに、「子ども主体と遊びの継続」を目標に、昨年度のクラスを中心にして、7月以降の子どもの姿を各エピソードにまとめた。長期にわたる子どもの姿を振り返り記録することで、育ちを理解し、興味・関心・探究心を子ども達と一緒に味わう。その体験の深まりが次の年度（新クラス）でも続けていけるように、昨年度と今年度と合わせて記述した。

＜図1＞8つの新たな気づき

①「あ！あった」と気付く	はじまり	あっ！と気付く 疑問に気付く（なんで？） あれ？なにか？（に気付く） 疑問に気付く（なんで？） 不思議に気付く
②聞いて知る、聞いて気付く	情報収集	疑問や不思議に感じたことを調べて気付く
③五感を使って気付く	行動による直感的、感覚的の気づき	見て気付く 見比べて気付く 触って気付く 感じて気付く 匂って気付く
④やってみて気付く	子どもの実際の行動	試して気付く（試行錯誤） 遊んで気付く（試行錯誤） うまくいかない事に気付く（試行錯誤）
②' 聞いて知る、聞いて気付く	情報収集	試したり、対象に関わる中で調べて気付く
⑤変化に気付く	以前との比較	違いに気付く 同じということに（一緒）気付く *経験から気付く
⑥振り返って気付く		新しい気づきの共有、違いに気付く、同じに気付く 他者の意見を聞いて知る
⑦「こんなことができる！」新しい方法の気づき	方法	何度も繰り返す中で新しい方法に気付く
⑥' 「振り返って気付く」	新たな可能性（方法）	同じ物事について共有しさらに、確信になる気づき
⑧「こんなことができるのでは？」の気づき		新たな方法

平成30年度 0歳児事例：いないいないばあ！って面白いね！

入園してしばらくすると、園での生活にも慣れてきて機嫌よく過ごせるようになってきた子ども達。初めは絵本にもあまり興味を示さない子も多かったが、日が経つにつれ絵本にも興味を示すようになってきた。

場面①「絵本を読んでもらうって楽しいな」

5月下旬頃から保育者に1対1で絵本を読んでもらう事を好むようになった。「いないいないばあ」の仕掛け絵本が好きで、高月齢児は保育者の読む声に合わせて「ばあー！」と言ったりする子もおり、読んでもらう事を楽しんでいる様子であった。その後「いないいないばあ」の絵本が好きだったので遊びの中に取り入れる事は出来ないか考え、6月下旬頃にハンガーに付いている紐を引っ張ったら動物のイラストが出てくる玩具を作った。子ども達もすぐに興味を示し、④指先で上手につまんで紐を引っ張り動物が出てくると嬉しそうに笑顔を見せている子もいた。

場面②「先生の顔、み一つけた！」

7月上旬、保育者の顔写真を使い手作りの「いないいないばあ」の絵本を製作し子ども達がいつでも見られるように、室内に置いておいた。担任保育者の顔写真を使用しているの、子ども達も興味津々で見しており、①自分の担当保育者の写真を見つけると指さして「あー！」と声を出して喜んでいる姿が見られた。そして7月下旬になると、高月齢児は保育者が「いないいないばあ」と言うと、その声に合わせて自分も顔を隠したりして、「いないいないばあ」が出来る子も増えてきている。

場面①



担当保育者との愛着関係を築けるように、ゆったりとした雰囲気の中、1対1で関わる時間を多く設ける様にした。

先生の膝の上
嬉しいなあ！



びよ〜ん！

うさぎさんが出てきたよ！

子どもが立ち上がった時、つかまり立ちをした時に手が届くような高さに吊るすなど、工夫をし、運動面も発達出来る様に工夫をした。

場面②



先生み一つけた！



顔写真を
使った絵本

いないいない...



ばあ！



顔写真を使った「いないいないばあ」の絵本も、保育者に対する愛着関係を築く1つとして取り入れた。絵本も自分たちでめくれるように工夫をした。結果として子ども達は自分の担当保育者の写真を見て指さしをしたり、写真と保育者を見比べて一緒という事に気付いて楽しむ姿が見られた。また、担当保育者の顔を指さししている姿を見て、保育者に対する愛着というものも出来つつあるのだと目で見えて感じる事が出来た。

◎考察◎

保育者と1対1で関わる時間を多く設け愛着関係を築けるようにし、その中で興味を示すようになった「いないいないばあ」の遊びを取り入れた事で、保育者とのより深い関りを持てるようになった。この活動を通して、現段階では①と④の気づきが中心となっているが、今後子ども達の発達に応じてやってみようとする気づきや、変化に気付いていける様に環境や玩具を工夫し、五感を感じられる遊びを取り入れていく事でその他の気づきを増やし、夢中になれる遊びを子ども達と一緒に見つけていきたいと思う。

平成 29 年度 0 歳児事例

「みかんの皮っていい匂い！」

きっかけ(1月中旬)

- ①「あ！あった」と気付く②聞いて知る聞いて気付く
③五感を使って気付く④やってみて気付く
⑤変化に気付く⑦「こんなことができる」の気付き

新聞紙のちぎり遊び、おはながみ、トイレットペーパー、綿などの様々な素材を使って楽しんできた。活動を経験するにあたり、どんどん指先の発達も著しく成長し、なにか他に五感を感じながら遊ぶことができないかを保育者間で話し合い、そこで幼児クラスの給食で出るみかんの皮を使った感触・ちぎり遊びが面白いのでは？と実際に用意してみた。(1月中旬)

場面①「なんだか見たことがあるなあ…」

みかんの皮だけでなく、大きさや厚さが異なるぼんかん・グレープフルーツなどの皮を保護者に協力を得て、子どもたちとの活動の中で触れる機会を持った。



おお～
よく破れるなあ



よいしょ！

すぐに興味を示し、①感触に触れ遊ぶ子もいれば、②恐る恐る他児が遊ぶ様子を見ている子もいる。初めはみかんの皮に触れることを躊躇していた子どもも、他児が遊ぶ姿を見て“触ってみたい！”と感じ、③恐る恐る手を伸ばし触れてみたり、握ったり、ちぎったりする姿が見られた。(1月下旬)

場面②「みかんの皮からいい匂いがしてきたよ！」(2月初旬)

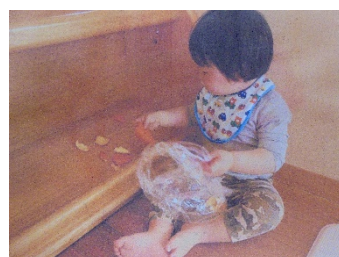
すると、高月齢児のUちゃんが④みかんの皮をちぎっていたら、ほのかに香るみかんの匂いに気付き鼻を近付かせた。保育者が「本当だね、みかんのいい香りがするね！」と話しかけると、⑦Uちゃんは嬉しそうに他のみかんの皮の匂いも嗅いだ。⑦それを見ていた他の子どもも真似をして、みかんの皮の匂いを嗅覚で感じ楽しんでいた。

場面③「みかんの皮+片栗粉を入れるとどうなる？」

夏に片栗粉の感触あそびを経験したことから、みかんの皮と片栗粉を混ぜ合わせると感触は変わるのかと保育者間で意見が出たことから実際に環境を整え行ってみた。みかんの皮に水溶き片栗粉を混ぜるとみかんの皮の成分が関係しているのか、柔らかかった水溶き片栗粉が固くなるという⑧不思議な感触を経験することが出来た。⑤感触が変わったことに気付いた高月齢児の子どもたちは手で揉んで「ムニュムニュ」、「冷たい」など簡単な言葉で子どもなりに表現し、感触の違いや見た目の新しい気付きが生まれていた。



クンクン…
良い匂いがするよ！



みかんの皮の感触が好きなのが
多かったので、他に違った感触が
楽しめるよう、みかんの皮に水溶
き片栗粉を混ぜてみた。



むにゅむにゅ、
冷たいなっ！



考察

様々な素材のちぎり遊びを経験してきたことから、今回やってみて気付く・五感を使って気付くを中心にみかんの皮のちぎり遊びを楽しんできた。ほとんどの子が経験したことのないみかんのちぎり遊びに初めは中々遊び込めない子もいたが、回数を重ねるにつれ、匂いや見比べる姿、袋に入れたみかんの皮と片栗粉の新しい感触に、感触の変化にも気付く姿が見られた。子どもが今まで経験してきたことを子どもなりに表現することが出来ていたので、引き続き子どもの豊かな感性を大切にしながら関わっていきたい。

- ①「あ！あった」と気付く②聞いて知る聞いて気付く③五感を使って気付く
④やってみて気付く⑤変化に気付く⑦「こんなことができる」の気付き

平成30年度 1歳児 事例

きっかけ 4月下旬の詰め込み遊びで、トイレットペーパーを夢中でちぎっている子も多かったので、次の活動では、保育者の“素材に触れ、ちぎったり引っ張ったり、色々な感触を味わってほしい”という思いから、感触あそびと詰め込み遊びの両方を同時に出来ればもっと楽しいのでは？と、職員間で話し合い、キャベツを使って遊ぶことにした。(6月上旬)

場面①「そうだ、入れてみよう！」

傍にあるペットボトルを見つけると、⑤以前チェーンやパスタを使って、ポットン落としをした経験があるからか、キャベツを入れ始めた。ペットボトルの口が小さく、そのままでは入らないことに気付くと、⑦入るくらいの大きさまでちぎって入れたり、口の上に乗せ親指で押し込んだりしている。

場面②「どうしたら出てくるのかな？」

見て！ちっちゃくちぎったよ！

何だかおいしそう…！ごくごく。

なんで出てこないんだろう？

親指でぎゅっ！

振っても出てこないよ～！

ひっぱったら、出てくるかな？

振って遊ぶ中で、④今度はペットボトルを逆さにしてみたが、出てくると思ったのに出てこない。はじめは苛立つ感情を表現していたが、保育者が「なんでかな？」とペットボトルの口からキャベツをのぞいてみると、同じように、①なぜだろう？と穴をのぞき込んだり、⑦逆さにしたペットボトルの口に指を入れ、引っ張り出そうとしたりする姿も見られた。

場面③「押し込んでも、入るかな？」

③お友だちがこんなことしてたな、、、

少しずつ指でぎゅってしたら入った！

新聞紙が大きくて中々入らないなあ？

⑤キャベツと一緒に！

細く伸ばしたらどうか？

ゆっくり入れてみよう！

新聞あそびでは、始めは大きくちぎった紙を強引に入れようとしていたが、②他児がちぎって詰め込む姿を見ると、④ペットボトルの穴よりも大きい新聞をどのように入れようか、子どもなりに様々な方法を考えて試していた。中には前回のキャベツ遊びと同じ方法で試す子もいた。(6月下旬)

考察

キャベツや新聞の感触遊びを通して、上記のように、なぜだろう？と不思議に思ったり、出来ると思ったのに出来ない事をなんで？と感じたりする場面も見られた。また、以前経験したものとの違いに気付き、こんなことが出来る！と新しい方法も生まれた。何度も繰り返し試すことで、沢山の気付きが生まれたのではないかと考える。今後もさまざまな仕掛けを作っていくながら、こんなことが出来るのでは？の経験まで出来るよう、環境を整えていきたい。

【平成 29 年度 1 歳の事例】

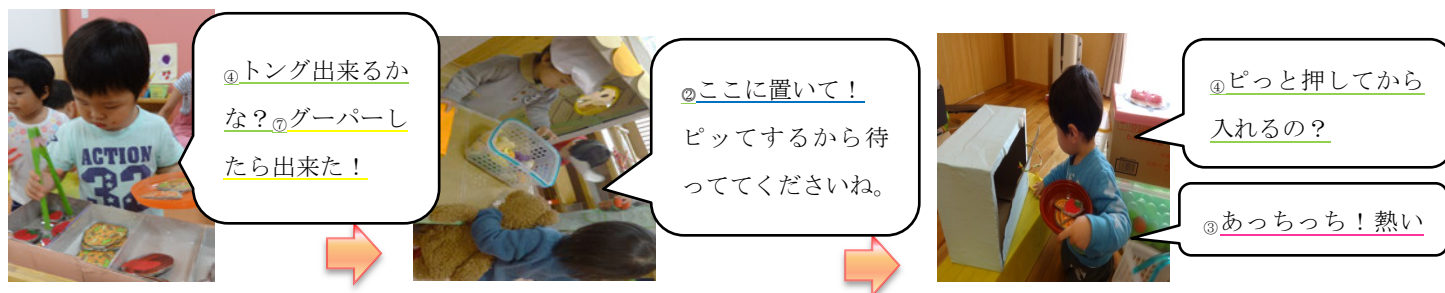
『僕がお母さん！』『お店屋さんになる！』

①あ！あったと気づく②聞いて知る 聞いて気づく③五感を使って気づく
④やってみて気づく⑤こんなことができるのでは？⑦こんなことが出来る
(新しい方法の気づき)

◇きっかけ◇

場面①『ママのまねっこ！』～身近な人の真似っこをして楽しむ～（5月）

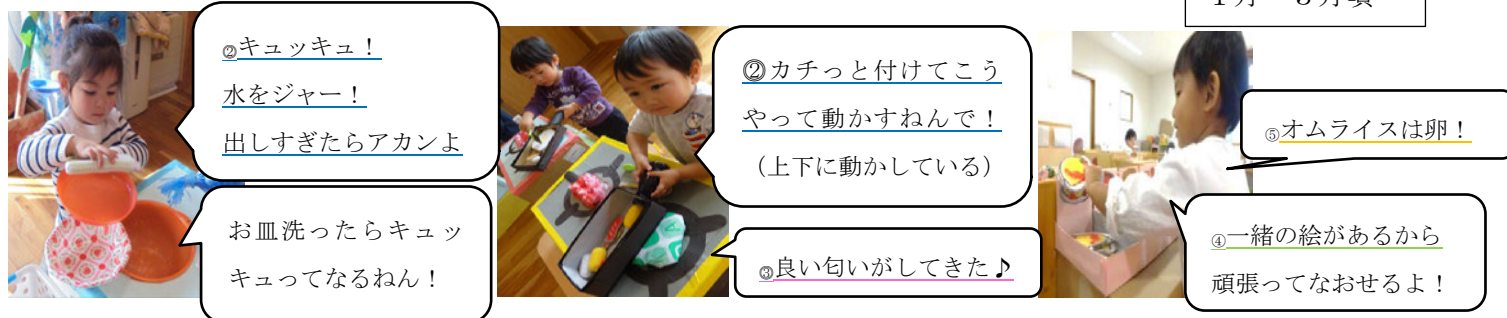
0歳の頃からみかんの匂いや様々な感触の見立て遊びの経験を通し、イメージ力が育ってきており1歳児では布製の⑥果物を絞ってジュースにしたり、①食べ物やチェーンを「うどん長いね」と麺類に見立てる楽しさを味わう事が出来ていた。そこで、より日常生活の事を表現して遊べないかと考え、大好きな絵本“おべんとう”の食べ物を廃材で作ったり、容器を用意した。その後手作りコンロや流し台、電子レンジ、冷蔵庫などを徐々に増やしていった。①「あっ、絵本と一緒に！！」とお皿とトングを持ち、⑤「この卵と焼きそばまぜまぜしてみよう」と言いながら、お母さん気分になって好きな食べものを②レンジに入れたり、④お店屋さんとお客さんに分かれ「いらっしやいませ」と自然と役割を決めて楽しむ姿も見られた。



場面②『これはどんな音？シャカシャカ？』（1月中旬）

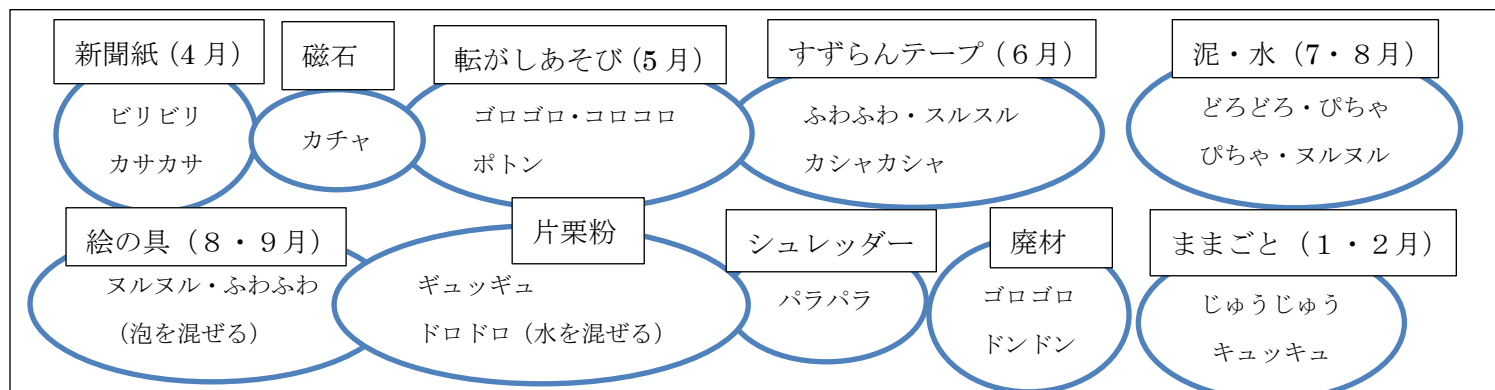
普段の遊びの様子を見ていると自分の動作（歩く、石を落とす、玩具を叩き合わせる）に自然と擬音を付け口に出して楽しんでいる子が多くいた。

1月～3月頃



～振り返り～

偶然にも遊びの中から、音を付けて楽しむ子が多くいた為、音をイメージして遊べる遊びはないかと考えた。最初は①あったと気づく事が多く見られたが、繰り返し遊ぶ中で④やってみて（遊んで）気づく姿が多く見られた。後期では言葉も増え、身近な人の真似がブームになりあそびが広がり、②聞いて知る、見て気づくが多く見られた。ままごと遊びの中で音をつける楽しさがより会話を引き出し、一人遊びからグループ遊びまで広がっていったのではないかと思います。（下記の図は1年の遊びから出た音の図を表している）



平成 30 年度 [2 歳事例] 「おからあそび」プロジェクト

◇きっかけ～昨年度の経験を生かして～（4 月 4 週目）

昨年度からさまざまな感触遊びを楽しんでいたのが今年度も引き続きおからあそびを保育に取り入れた。

食物アレルギーの子どもが多くいるので全員が触って楽しめる食材を考え話し合い、おからを用意した。

場面①：「ふわふわ！気持ちいい！」（4 月 4 週目）

最初はおからを知らない子どもが多く、①見て「雪みたい」と話す姿が見られた。どんな匂いか尋ねると③「豆腐みたいな匂い」と話し、「給食と一緒にやな」と言い合っていた。感触あそびを始めると、③握ったり丸めたりしながらおからの感触を言葉で表現して保育者や他児に伝えていた。おからを集め丸めたり、③匂いを嗅いで「いい匂い！」と話す姿が見られた。また偶然に⑥おからと砂が混ざったことによって色や感触が変わったことにも気づき、不思議そうにしていた。感触を楽しんで欲しいとあえて玩具は用意していなかったが、自ら砂場の玩具を持ち出して見立てあそびや型抜きを楽しんでいた。

振り返り

意欲的におからに触れ、感触を楽しむ様子が見られ、匂いを嗅ぐことで感触以外の発見を楽しみつつ見立てあそびをする様子が見られた。その後 5 月 3 週目にキッチン用品などを用意しままと、6 月 3 週目に食紅で色を付けおからあそびをした。時間が経ったおからに保育者が用意した霧吹きをやってみると湿っぽく冷たくなることに気付いた子どもたち。その姿を見てもっと様々な感触に触れてほしいと考え、環境構成を話し合った。



場面②：「いろんなおから」（7 月 4 週目）

今まで使ってきたおからに新しくレンジで温めたおからを用意した。③温めたおからの感触に、「これもおから？」といつもと違う感触に気づいた様子だった。終わった後、子どもたちと話をしているときに⑥温めたことにより、一層匂いが強くなって今まで匂いに気づいてなかった子どもからも「匂いがする」と言っている姿がみられた。

振り返り

温めたおからに興味を持ち、「これもおから？」と保育者に尋ねる姿がみられ、多くの子どもが匂いにも気づき「匂いがする」「おいしそう」と言いながら遊ぶ姿が見られた。

考察

おからの感触あそびを通して匂いや感触の変化に気づいて遊ぶ様子が見られた。また色付けすることにより視覚が刺激され、遊びながら③五感を使って気付くことが多く見られた。1 歳で自ら試し遊ぶ経験が出来ていたため見立て遊びもよりリアルに表現しようとする様子が見られた。今後も子どもたちの五感を刺激していけるような食べ物や植物に視点をのけた遊びを見つけ、また何度も繰り返し遊ぶ中で変化に気付いたり、こんなことができるなどの経験ができるように環境構成を行っていきたい。



平成 29 年度 2 歳児 事例 色んなお仕事をやってみよう！

きっかけ ～お友達ともっと遊びたい！～

1 月頃から他児との関わりが増え、一緒にままごとや見立てあそびを楽しむ姿が見られた。おうちの人になりきって言葉のやり取りを楽しむ中で⑥お店屋さんごっこへ発展していった。

場面①「いらっしやいませ！」（2月上旬）

看板を作りお店屋さんのコーナーを設けると、子ども同士で言葉のやり取りが増えた。お皿にフェルトの野菜をのせてご飯を作ったり、チェーンをラーメンなど麺類に見立てて料理している姿が見られた。

また手作りでお金を作っておくと、最初は集めることや、ただあげ合うことを楽しんでいたが、保育者がお金と商品の交換をして見せると④少しずつお金のやり取りを理解し、子ども同士でも作ったものを売ったり買ったりしてやり取りが見られるようになった。その後⑧「明日もお仕事したい」と話す子どもたち。具体的にどんな仕事がしたいのか尋ねるとお医者さんや消防士、警察官、郵便屋さん等、働く車に関連する職業が多く希望に上がった。

場面②「いろいろなお仕事、楽しいな！」（3月上旬）

各コーナーに補聴器や注射、薬などの小道具や、段ボールで作業服を作り、環境を整えた。

1, 2 : ④・⑥「どうされました？」「お熱があるんです」「注射します、痛くないですよ」等とやり取りを楽しみながら、お医者さんと患者さんになりきって遊んでいる。

3 : 警察官が保育者と一緒に園内をパトロールして見回ったり、④「何か困ったことはないですか？」と尋ねしっかりと警察官になりきっている。

4 : ④消防士では段ボールで作った火をホースで消して回ったり、コンロを使ってままごとをしている他児に火事に気を付けるよう声を掛けていた。

5 : 郵便ポストを置いておくと菓子箱を入れて「ママのところ届けてもらう」と話している子や、裏に回って④「荷物が届いてた！」と話す姿が見られていた。

②聞いて知る、聞いて気付く ④やってみて気付く

⑥振り返って気付く ⑦新しい方法の気付き

⑧こんなことが出来るのでは？の気付き

赤ちゃんにご飯作
ってあげよう！

これください！

100 円です！

おいしいラー
メンですよ～



⑦・②子ども達は自ら置いてある廃材や容器を使って見立てながら言葉にしてなりきり遊びを楽しんでいた。

考察

2 歳前期では洗濯屋さんごっこで出来た色水からジュース屋さんごっこを楽しんでおり、中期には秋の自然物に触れ、それを使って他児と見立て遊びを楽しんでいた。その様々な活動を通して自然事象や絵本などに興味や関心を持ち、やってみようとして繰り返し遊ぶ事が自分のイメージを豊かにしていったのではないかと考える。〇〇になりたいという思いにこだわり、どうなりたいたのかを自分なりに考えたりきっていたように思う。

今後も友達と関わる中で子どもの囁きを聞き逃すことなく、より楽しめるよう子ども達の姿に応じた環境構成を考えていきたい。

平成30年度3歳児事例「ほらっ！テントウムシ！」

きっかけは、園の近くへ春の草花を探しに散歩に出かけたとき見つけたテントウムシ。

6つの気づき①「あ！あった」と気付く ②、②' 聞いて知る、聞いて気付く ③五感を使って気付く ④やってみて気付く ⑤変化に気付く ⑥、⑥' 振り返って気付く ⑦新しい方法の気づき ⑧「こんなことが出来るのでは？」の気づき のそれぞれの下線の色で示す

場面1 「テントウムシ飼いたい〜！！」

4月18日、散歩先で①葉っぱにテントウムシがいることに気付く、葉っぱをかき分けながら探す様子が見られた。



テントウムシを持ち帰り、部屋で飼育ケースに入れて育てることになった。子どもたちはテントウムシの体は③「オレンジ」や「赤」と認識していた。

4月19日、テントウムシのエサは葉っぱであると予想した子どもたちは、クローバーやタンポポを採取し、石や枝などの自然物で飼育ケースの環境を整えた。

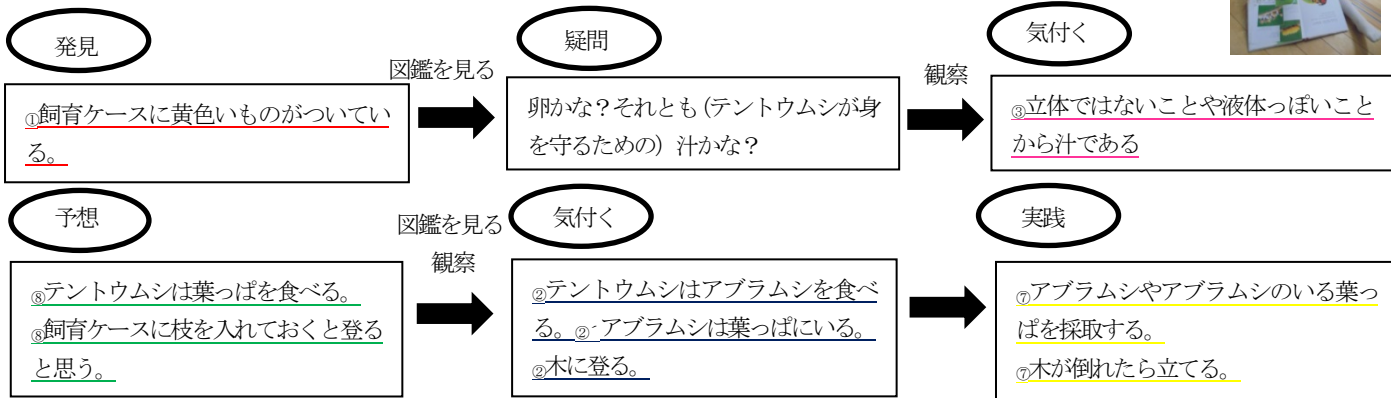
4月20日、ベランダの亚克力板に止まっていた③テントウムシを裏から（お腹側）から見ただけでテントウムシだと気付いた。保育者と共に「お部屋のテントウムシ逃げたのかな？」と話していたが、③テントウムシの体の模様を確認すると部屋では飼っていないナミテントウであった。種類の違うテントウムシに大興奮し、②図鑑を開いて同じ体の模様のテントウムシを見つけ、保育者に名前を覚えてもらおうと②「ナミテントウ！ナミテントウ！」と名前をすぐに覚えていた。



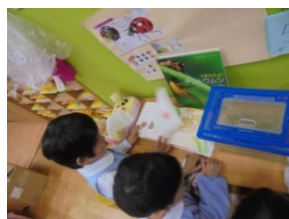
ナミテントウ ナナホシテントウ

場面2 「いつでもどこにいてもテントウムシ！テントウムシ！」

保育者がテントウムシの絵本や図鑑を置いたり、種類を見わけやすいように掲示を工夫したり、部屋を整えると興味を持つ子どもが増え、テントウムシについてほとんど知らなかった子どもも、②絵本や図鑑から情報を得て、④飼っているテントウムシと照らし合わせるなど詳しくなった。



③卵って黄色やで！



テントウムシの行動を言葉で表現し、テントウムシの様子を②友達と共有したり、保育者に知らせたりするだけでなく、保護者に話す子どもも多くいた。絵本のストーリーでテントウムシが葉っぱのツルで綱渡りやブランコをしているシーンがあり、テントウムシを観察しながら絵本の世界と重ねて表現していた。絵本や図鑑を通し、実際にテントウムシの観察をすることでテントウムシについて知ろうとする姿が見られる。外に行くたびに「テントウムシに」と言ってエサを探し、見つけたら握りしめて、部屋に帰っていた。初めに飼育ケースの扱いとして保育者が「叩いたらびっくりするから優しくね」という呼びかけをすると④テントウムシを育てていくうちに、常にテントウムシのことを考えたり、飼育ケースの扱いを子ども同士で注意しあったりなど、子どもたち自らテントウムシに対して優しくなったように感じられた。

トコトコって歩いてる！



見て！③綱渡りしてる〜

③ピューって飛んだ！

何匹おるかな〜？

場面3 「飼育ケースの中に幼虫発見〜！！」

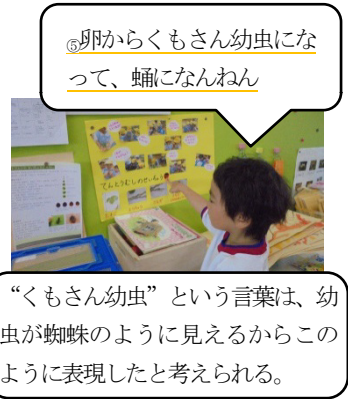
5月7日、朝から⑤飼育ケースを覗いていた子どもが「幼虫がいる！」と保育者に伝えに来了。葉っぱに卵が付いていたのか幼虫が4匹いた。子どもたちは、②図鑑を手し、幼虫の大きさを見ながら、どの段階かを②確認し合っていた。図鑑には、幼虫の脱皮の段階した時の大きさとおおよその期間が記されていた。その中に、幼虫を拡大した写真が載っていたため、保育者が「今これくらいかな？」と問いかけると「まだまだやで、これくらいちっさいもん」と拡大した写真ではなく実寸の写真を指差した。ここまで大きくなると思った子どももいた。成虫のナナホシテントウには絵本のストーリーからとってきた「てんてんちゃん」という名前がつけられ、異年齢児にも人気であった。



テントウムシの成虫と幼虫は形も模様も違うため、図鑑で知り、テントウムシの幼虫だと認識したと考えられる。

場面4 「テントウムシが・・・」

5月15日、急に気温が上がり始めたこともあり、成虫も幼虫も死んでしまった。残念がっていたが、命や死に対してまだ理解ができなかったのか、④死んだテントウムシを触りすぎて、羽がボロボロになってしまった。保育者は「テントウムシかわいそうだよ」と②生き物を最後まで大切にするように子どもたちに伝えた。テントウムシがいなくなってから静まり返ったことから子どもたちの中でテントウムシの存在の大きさがよくわかる。2日後園庭で、①畑に行くと様々な種類のテントウムシがいて、子どもたちは夢中になって次々とテントウムシを見つけ、飼育ケースに入れた。その後も、場所を変え、園内の草花が多く生えている場所で遊んでいると、テントウムシの卵、幼虫、蛹、成虫のすべての段階の状態を発見した。子どもたちは部屋に戻るなり、②図鑑を取り出し、「こ



⑤卵からくもさん幼虫にな
って、蛹になんねん

“くもさん幼虫”という言葉は、幼虫が蜘蛛のように見えるからこのように表現したと考えられる。



れ(実際のテントウムシ)これ(図鑑の写真)やで」と見比べろ々に話した。興味津々で「ほら、ここ歩いてる！こっちにも！」と飼育ケースのフタを歩いているテントウムシの後を目と指で追っていた。嬉しそうに飼育ケースを覗き込み、集中してテントウムシの観察をしていた。しかし、テントウムシの様子を見たくて、飼育ケースのフタを開けたものの上手く閉めることができず④「みんなが開けるから逃げちゃった」と落ち込んでいる子どももいた。

場面5 「新しい命の瞬間」

5月21日、さなぎが動いていることに気付いた保育者が「さなぎが動いてる！もう少しで出てくるとちゃう？」と呼びかけると、子ども全員が近寄った。テントウムシを囲み、「見たい！見たい！」と一斉に大騒ぎしながら、真剣な眼差しでテントウムシを見続けた。すると、テントウムシは5分ほどかけて、ゆっくりゆっくり皮を脱ぎ、出てきた。黄色く羽がピカピカしたテントウムシに子どもたちは、③「出てきた」「黄色いや」「すごーい」と大興奮していた。テントウムシが生まれるなり、本棚から図鑑を取り出して次の生長段階を調べ始めた。テントウムシが羽を広げている姿を見て「③羽乾かしてる」と生まれただてしか見ることができない様子をじっくりと観察した。生まれただてのテントウムシを嬉しそうに持っていた子どもが④誤って羽を潰してしまった。それをきっかけに生き物の命の大切さを保育者は伝えた。



⑤なんで黄色なん？



見たい！見たい！



②「こうやって点々が出てくるねん！」



③ぎゅーって出てきてんで

場面6 「テントウムシ探しの名人かも！？」

5月31日、園の周りをみんなで散歩していると、子どもたちは⑥道に生えている草花をよく見ており、すぐにテントウムシを見つけられるようになっていた。「テントウムシってどうやって歩いてるん？」と保育者が聞くと、1人の子どもが④高速でハイハイをしてテントウムシの歩き方を少し恥ずかしそうにニコニコしながら表現した。

⑥葉っぱのどこにいるはず…



⑥「ナミテントウ



⑥「生まれただてのテントウムシおった！」



⑥「逃げないようにのりでしっかりベタベタ貼るねん！」

考察

テントウムシを飼育したことをきっかけに、絵本や図鑑などを通じて、子どもたちの興味・関心がより深まっている。保育者が、子どもの興味関心を引き出せるように、子どもの「今好きなもの」「熱中していること」をよく見て、それにあった環境づくりをしていくことが大きなきっかけ作りとなると考えられる。

散歩で出会ったテントウムシだったが、飼育することをきっかけに絵本や図鑑などで主体的に知ろうとする姿が見られた。テントウムシのことを知れば知るほど興味・関心が深まり、「これってこうやと思う」「なんでなんやろ」など仮説を立てたり、疑問を持ったりする姿が見られた。生き物を飼うにあたり、少しずつ命についても考えられるようになってきたと感じられる。生きているテントウムシもイラストのテントウムシも見つけることが得意になり、普段の生活でもテントウムシのことを意識してみている。子ども同士でテントウムシの動きを自分なりの言葉で表現し合うから、友だちとともにテントウムシの成長段階を確認し合ったり、変化に気付いたり、予想をしたり多くの子どもたちでテントウムシについて考えることが出来たのではないかと考えられる。しかし、なかなか興味を示さない子供どもの中にはいるため、興味を持ちにくい子どもと一緒に興味を持てるようにしていくことが今後の課題であると考え。子どものこれらの気付きに繋がったのには、2歳児クラスの際、身近な人を見る力が育っていることから、虫の観察を細かくするとともに観察で興味を持ったことを自ら調べてより深い学びになっていることが分かる。こどもの興味関心を持続させるために、子どもと一緒に振り返りの時間を大切に、今後も子どもたちの中でテントウムシが生き続けるよう、普段のあそびや行事を通して取り入れていきたい。

平成 29 年度 3 歳児事例【お寿司作りしたい！】

- ①あ！あったと気付く②聞いて知る聞いて気付く③五感で気付く
④やってみて気付く⑤変化に気付く⑥振り返って気付く⑦こんなことができるの
の気付き⑧こんなことができるのでは？
⑧こんなことができるのでは

場面①「お寿司の作り方ってどんなの？」

7月頃、子どもたちの会話の中でお寿司を食べに行った話をよくしていた。そこで、環境構成の中でイメージしたものを作る材料を置いておくと、どんな活動に興味を持って広げるか試してみることにした。①冷蔵庫を作りお寿司のネタをフェルトやプチプチを使って作り、お寿司作りが出来る環境を整えることにした。7月中旬お寿司屋さんごっこがブームになり、本物のお寿司を作ってみては？と園長先生や厨房の先生たちと話し合いの中で案が出たので、話し合った結果、本物のお寿司作りをすることになった。その前段階として、給食のご飯を使っておにぎり作りをすることにした。お家の人に聞いてきたことをみんなで話し合い、②どうやっておにぎりを握ればいいのかをジュエスチャーや言葉で教えてくれた。「ぎゅっとするって言ってた！」「塩も入れるってママが言ってた！その方がおいしいねんて！」「のりもしないと」といろいろな意見が出てきた。給食の時間になり初めてのおにぎり作り！みんな「やった！おにぎり作りや」と大興奮であった。③「ギュッギュッつてしよう！」と小さな手で力いっぱいおにぎりを握っていた。「へい、いらっしやい、も言わんとあかん」と言う子どももいたが、実際はみんな話をせず真剣に作っていた。④うまく握れておらずに食べようと思ったら崩れてしまう子どももいて「あ〜。」と残念がる子どももいた。自分たちで作ったおにぎりを「おいしい」とよく食べていた。

どれが良いですか？



ギュッ、ギュッつてしよう！
崩れないように！



いただきまーす！おいし
いな！
③ご飯いい匂い〜！



④熱くて握るの難しい！
ペタンコになる・・・

②2本指で握ると
本物みたい！



自分の食べたいお
寿司作りするよ！

場面②「小麦粉粘土でのお寿司作り」

7月下旬になり、より本物のお寿司屋さんごっこをしたいという子どもたちの思いがあり、⑥何が必要なのかを考え話し合い、帽子が欲しいという声が出てきたので帽子を用意した。そして、③感触も楽しめるように小麦粉粘土でのお寿司作りを行った。色付きのスポンジを切り、コーンやいくらに見立てられるようにしたり、画用紙を切っておき海苔巻きが出来るように用意するなどした。握る手つきも少しずつ上手になってきていた。赤の粘土を使って「マグロです！」と言ったり、オレンジは「ウニです」と言って色で見立てて遊んでいた。作り終わると「いただきまーす」と食べたり、パックにお寿司を入れて「お持ち帰りです」と友だちとお寿司屋さんごっこを楽しんでいた。



海苔巻き出
来たよ！い
た だ き ま
す！

場面③「本物のお寿司作り〜！！」

8月上旬、本物のお寿司を作る前に保護者の方のにも協力してもらい、②お寿司のネタやお寿司作りには何が必要なのかを考えてきてもらうことにした。生ものは保育園では出せないのが、⑥子どもたちと話し合いをして具材もシーチキン、コーンマヨ、カニカマ、きゅうり、たまごと子どもたちと一緒に決めた。

②指を二本出して「こうやって握るねん」「ギュっつてしなあかんねんて」「酢も塩も砂糖もいるって」とお家の人に聞

いて来たことを教えてくれた。お寿司作り当日は朝から「お寿司作れる！」「早くやりたい」と楽しみにしていた。作る前は「(お店の人) へい、いらっしゃいって言うから、へい、いらっしゃいって言わないと」と言っていたが、作り始めると夢中でお寿司を握っていた。⑤おにぎり作りの時は熱かったご飯が酢飯になると少し冷めていて触っても熱くないことに気づき、「熱くない」「酸っぱい匂いする」と話していた。具材をフォークで入れるのが難しく「難しい」と言いながらも小さな手で懸命に握っていた。自分たちで作ったお寿司は美味しかったようで「美味しい」と言って食べていたが酢が入ることにより酸っぱくなっており、「なんか味が違う。」という子どももいた。遊びから始まったお寿司作りだったが、遊ぶだけでなく本物の食べられるお寿司作りを経験してより深い遊びになったのではないかと思う。しかし、本物のお寿司作りは作って満足してやりとりまではいかなかったのが反省点である。



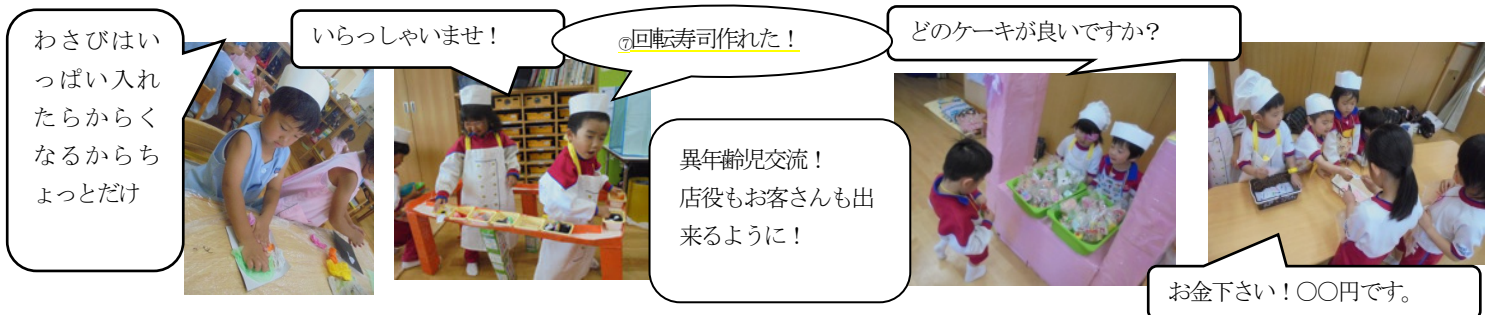
場面④「持ち帰りのお寿司作り」

以前、小麦粉粘土でお寿司作りをし、みんなでやりとりを楽しんだが今度はお家の人にも見せたい、持って帰りたいという意見がでたので、敬老参観祖父母と一緒に寿司作りを行うことにした。祖父母が部屋に入ってくると「いらっしゃいませ」と声を掛け、「何のお寿司がよいですか？」と注文を聞いていた。「少々お待ち下さい」と言ってお寿司作りを始め「どうぞ」と渡したり「お持ち帰りですか？」とやり取りを楽しんでいた。お寿司を作る⑦祖父母をお客さんにして接客を自分達で行なうことが出来るようになり嬉しそうだった。

場面⑤「お寿司カウンターを作ろう」

⑧8月下旬、9月上旬とさまざまな素材を使ってお寿司作りが出来るように折り紙やお花紙、でんぷんのりに緑の絵の具を混ぜてわさびに見立てられるようにと工夫し、子どもたちが楽しめるように環境を整えると「早くやりたい」と言って活動していた。また、⑧回転寿司を作ろうと案が出たので、子どもたちとカウンター作りを行うことにした。どのようにすれば回転するのかを考えたが、子どもたちには難しかったようで、「牛乳パックを使って作ってみる？」と保育者が提案すると「やってみる！」と喜んで作り始めた。

④牛乳パックが離れないように押さえながら保育者とテープを貼っていた。上手くくっつかずに「出来ない」と言いながらも協力して作り上げた。出来上がったカウンターで子どもたちは巻き寿司屋さんをしたり、回転寿司ごっこをして遊んでいた。最後にはいろいろなものを流して遊び始めるようになった。この夏の経験が繋がって、秋、冬にはケーキ屋さんごっこに発展し、ケーキ作りに必要なものを考え、自分達で用意し⑦店員さんお客さんと役割を決めて遊ぶ姿が見られた。また、異年齢児との関わりで買い物ごっこをした際にはケーキ屋さんをし、接客まで子どもたちが交代で行った。自分たちで作ったケーキを売って「ありがとう」と言って貰え、嬉しそうにしていた。



考察

この活動は子どもたちとの会話から生まれたあそびであった。始めは、フェルトや小麦粉粘土などを使ってのお寿司あそびだったが、実際におにぎりやお寿司を作る経験を経て、聞いて知る事ややってみて気付く事が多く見られた活動となった。この経験から次は、試行錯誤したり新しい方法の気づき多くが生まれるように子どもたちの夢中になって遊んでいる姿を捉えて活動を進めていきたい。

平成29年度
4歳児の事例

- ①「あ！あった」と気付く ②②「聞いて知る 聞いて気付く ③五感を使って気付く
④やってみて気付く ⑤変化に気付く ⑥⑥「振り返って気付く
⑦「こんなことができる！」新しい方法の気付き ⑧「こんなことができるのでは？」気付き

「水の色が変わった！～いろいろな色の氷や水を作りたい～」

◇きっかけ◇

秋頃から飼育していた蓑虫。プリンの容器に水と木の枝と葉っぱを入れて餌にしていたが、ある日突然、⑤容器の水の色が透明から茶色に変わっていたことに気づいた子ども達から、②「どうして色が変わったのか？」とクラス全体に興味広がっていった。

◇第1章 「なんで水の色が変わったのかな？」◇

「蓑虫のうんこかな？葉っぱちゃう？」

2歳児の時には、色水作りや泡あそび、3歳児の時にはトマトやみかんの皮などから色水を作って遊んでいたため色水への興味は持っていた。その為、どうして水の色が変わったのか…グループごとに話し合いが始まるのも早かった。①「カップの中に蓑虫の糞があることに気付いたが、ずっと観察していた子どもが、「違うで！前は変わってなかった。初めてやで！」と言っていたので、「そしたら何？」と飼育ケースをじっと観察してみると、①「あっ！葉っぱが入ってる！葉っぱちゃう？」と一人の子どもが話し出すと、今までに経験したことを色々思い出してきて、⑥「前にも葉っぱ入れて作ったな」「大きな葉っぱ入れたら色、変わってたな」と盛り上がり、コップに葉っぱを入れて作って見るようになった。どんな葉っぱなら色が出るのか？「何色になるのかな？」と会話しながら、毎日観察している。少しずつ色に変化が見られるようになってきた。始めた時は、④葉っぱなら必ず色が変わると思っていたが、変わる葉っぱと変わらない葉っぱがある事に気づいたが、なぜなのかなかなか思いつかない様子だったが、葉っぱでの色水は色の種類が決まってきた。「どうすればきれいな色になるのかな？」と考えた結果、室内ではなく戸外に出して見るようになった。

◇第2章 「色々な氷を作りたい！」◇

場面①「氷ったで！いろいろな種類の氷を作りたい」

季節が冬になっていたので戸外に出した葉っぱの色水が凍った。すると子どもたちは氷が出来たと喜んで、もっと色々な氷を作りたいと氷作りへと変わっていった。保育者がどんな氷を作りたいかと訪ねると、⑧「色々な種類の氷を作るといって、「色紙や花紙を入りたい」「砂糖を入れたら甘くなるかな？」と色々な意見が飛び出し水の量も工夫していて、水を置いて氷を作る場所も自分たちで、ここなら氷が出来るかも？という事も考えてグループごとに色々な場所に置いていた。次の日の朝あそびの時に凍っている事に気づいた子どもたちが④「凍ってる！」③「固い」「冷たい」と大喜びで報告していた。



紙も一緒に凍ってる…。

氷にくっついてる。



トゲトゲが出来てる！

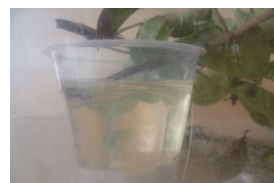


氷が溶けたら色水になった！

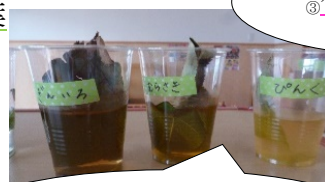
みんなで観察に行くと、④紙も一緒に固まっていたり、葉っぱに氷がひっついていたり、砂糖の水の氷の中にトゲトゲした形が出来ていることに気づいて、「これは何？」「なんで出来た？」「どこから現れたのか？」



水が茶色になってる！



④糞は入ってなかった…
でも色は薄く変化した！



③匂いはせ〜へん！

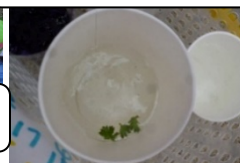
④茶色と緑だけやなあ



丸い輪っかがある



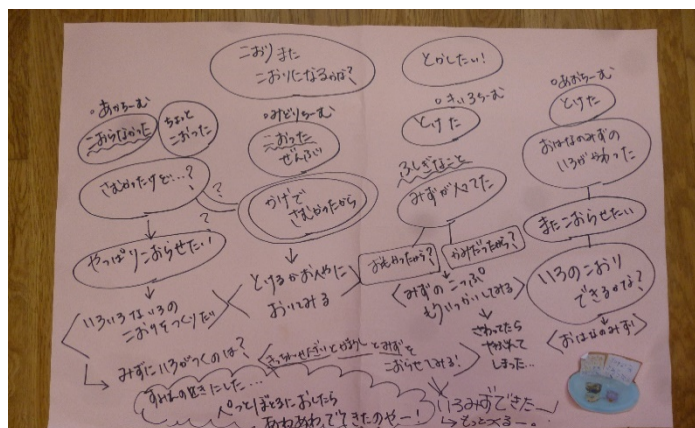
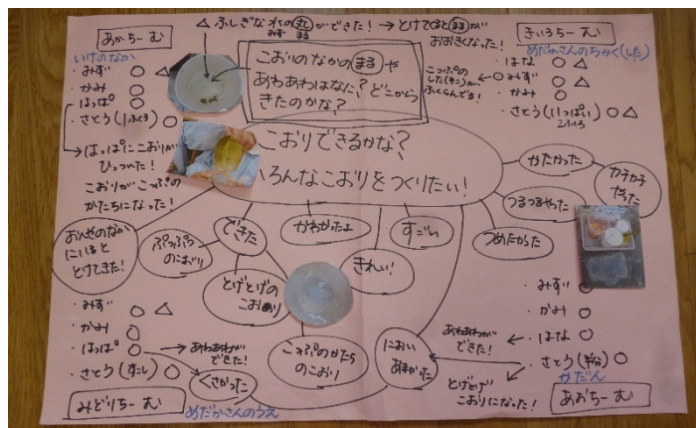
全ての水が凍った！



と話し合う姿も見られた。氷を作ることが楽しくて、「次は氷を溶かしてみたい！」と次は氷が溶けそうな場所を探して置いてみたり、「もっと凍らせたい」と戸外に再び置きに行く子どもも見られた。すると⑤氷が溶けて水になったのを観察した子どもが、「これ、色ついてる」と色水が出来たことに気づいて、⑥もっと色のついた氷を作りたいと発展していった。

◇振り返り◇

⑥”子どもと一緒に話し合い可視化することでわかりやすく、子どもたちからも意見がたくさん出てきた。



場面②「色水を作るには?～色のついた氷を作りたい!～」

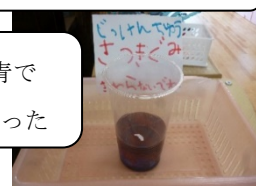
薄い紫の色水はお花紙を水に混ぜたことで出来たが、④水色の画用紙や折り紙は色水にならなかった事で、色が出るのと出ないのがある事がわかった。しかし何が違うのか?何が要因なのか?わからずに②”話し合いを重ねていた時に、「わかった。水が違うのかも?」という意見が出た。そこから水を水ではないのにするには…と話し合った結果、⑥”2歳の時の遊びを思い出した子どもが、「すみれの時にした、ペットボトルのあわあわ出来たのと違う?」「…そうや!あれも色水になってたやん」「魔法の水…やったっけ?」と担任の顔を見るので、「魔法の水やったと思うけど、何で作ったか覚えてる?」と聞くと、全員で考え込んでしまったので、「水に何か入れてなかった?」とヒントを出すと、「洗剤や」と思い出した子どもがいた。そこで紙は画用紙で、色は2色で、水と魔法の水の両方で作ってみることになった。

色水も作りたいけど氷にもしたい!との事で、作った水は戸外に出しておくことになった。次の日に見にいくと、氷にもなったし、色水にもなった。でも水も魔法の水も両方とも色が変わっている様に見えたので、溶かして水に戻してみることにした。休みを挟んでの月曜日に観察しようとしたら、赤ちゃんが触ってしまいこぼれてなくなってしまった…しかし0歳児の職員がもって来てくれた容器を見ると

⑤赤と青が混ざっていて、色が紫になっている事に子どもが気づき、「先生!色が紫になってるよ」「なんでなん」⑦「赤と青が混ざったら紫になるの?」と発見に興奮する姿が見られた。それからは⑧いろんな色を作って混ぜてみようとして色々な色



色水になった!凍った!



赤と青で
紫になった

の色水作りが始まった。透明の容器に画用紙かお花紙、魔法の水、今までに経験した通りに作って観察した。

◇第3章 「これとこれを合わせるとこの色になる!～好きな色を作りたい～」◇

④作った色水を混ぜ合わせて色々な色を作って見たが、なかなか好きな色にならず、紫と黄緑しか作れなかった。そこで始めから画用紙を混ぜて作ってみることにしたが、何色と何色の紙を混ぜておくかで悩んでいた。ある日、自由画帳にお絵かきをして遊んでいた子どもが、「先生!見て!」と興奮しながら⑨白い紙に黄色でお絵かきした上からピンクのペンで描くと、色が混ざって赤になったと教えてくれた。そこですぐに画用紙で作り始めた。

④黄色と青で黄緑になった



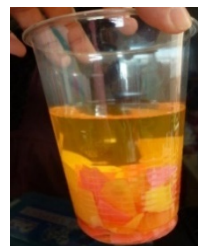
赤になった!
何でやろ?
すごいな!!



画用紙に描いたときは、黄色が下だったと黄色を下にして、ピンクが上になるようにコップの中に入れ、こ
だわって作っていた。でも④観察していくと、赤にはならずオレンジになった。どうしてなのかはわから
なかったが、時間が経てば変わるかもしれない！？と引き続き観察し続けていた。



⑤しっかり混ぜたら
変わるかな？



赤じゃない…
なんで！？
ペンと何が
違うのかな？

考察「色々な色水を作りたい！～気づく・試す・繰り返す・自分なりの方法で挑戦する～」

きっかけは飼育していた蓑虫で、水の色が変わったのは「蓑虫のふん」なのか？違う物なのか？の話し合
いで盛り上がり、要因が「蓑虫のふん」だったら面白いと思っている子どもが多かったので、違うとわかっ
た時は残念がっていたが、なぜなのかな？と違う理由を探し始めた。そこから、色々な葉っぱでの色水作
り、葉っぱから画用紙やお花紙・砂糖、途中からは氷作りにも発展して、最終的には複数の色を合わせて違
う色を作り出すことに夢中になっていった。

4歳児の子どもたちは、④やってみて気付く事が多く、図鑑を見たり調べたりするよりは、すぐに行動に
移して試したい気持ちが強く、五感に基づいて気付いた事（見たり聞いたり）を、すぐに実践して変化を楽
しむ姿が多く見られ、そこから試行錯誤を繰り返していた。途中で止まってしまう活動や思いもあったが、
自分たちでこうしたいという強い思いがあり、⑦「こんなことができた」⑧「こんなことができるのでは？」
と繰り返していくことで、確信に変わっていくこともあり、疑問が解けることを楽しんでいる姿も見られた。
子どもたちが疑問に思ったことを、すぐに考えたり試したり出来るように環境を整えておくことの大切さ
も改めて感じる事が出来た。また子どもたちの、面白い・もっとこうしたいという思いも大切にしていき
ながら、子どもたちが気づいた事を子どもたちの力で確信に変えていけるように関わっていきたい。

①あったと気づく②②'聞いて知る 聞いて気づく③五感を使って気付く④やってみて気づく⑤変化に気づく
⑥⑥'振り返って気づく⑦こんなことができる（新しい方法の気づき）⑧こんなことができるのでは？の気づき

【H30 年度 5 歳の事例】

恐竜は、こんなんやねんで！～イメージを形にしていく楽しさを感じる～

◇きっかけ◇年長のクラスでは恐竜が好きな子が多く、LaQ や折り紙で作って楽しむ子がいた。折り紙で紙
飛行機を作り遊ぶ中で、⑥遊具を的にして遊ぶ姿があった。⑧部屋でも飛ばしたいから室内用の的を作ろう
と「段ボール頂戴！大きいやつ！」と早速作り出す姿が見られた。（5月中旬）

場面①『的を作るなら、やっぱり恐竜やな！』（知ってる？イメージの共有）

恐竜的にしよ！

カッコいい恐竜がいい

②恐竜の世界には火山が

卵はもうすぐ赤ちゃんが生まれるから、当てたらあかんねん



⑧折り紙で火のところ
作ってみよ！

100って書く？

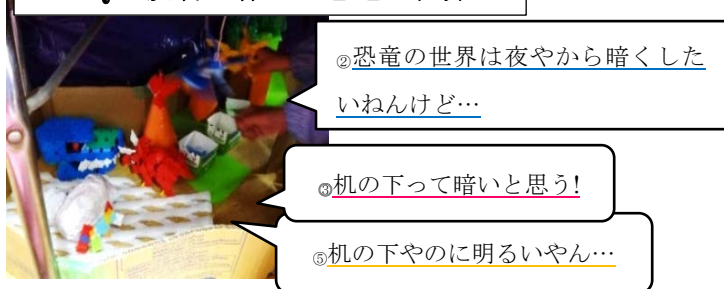
④当てるのも楽しいけど、⑧穴開けるっての
も面白いと思うねんけど…

⑥前は、下にばっかり行ったから下に穴開けよ！絶対入る

場面②『やっぱり恐竜の世界が作りたい!』(6月初旬)

◇きっかけ◇的作りの経験を通し、自分の恐竜情報を皆に伝え共有したり、ハサミやのり、廃材を使ってダイナミックに作った事が楽しかったのか、思いが膨らみ⑦立体的なものが作りたいとこだわりが出てきた。

<LaQ と廃材で作った恐竜の世界>



②恐竜の世界は夜やから暗くしたいねんけど…

③机の下って暗いと思う!

⑤机の下やのに明るいやん…



⑦おっ! 袋巻いたらいい感じ!

②飛ぶやつやから飛ばしたい!

③浮かへんかな〜テープで吊るしてみたらどうなるかな?

毎日作り続けた恐竜を集め、戦ったり、ごっこ遊びをしたり遊んでいた子ども達は「恐竜の世界が作りたい」と話が盛り上がってきた。「恐竜の世界はどんな所かな?」と問うと、映画の印象もあるのか②「めっちゃ暗いねん! いつも夜みたいな所!」と恐竜の世界作りの場所探し。ここがいい! と机の下で作ることに決定した。自分が想像してたよりも明るく、⑤段ボールや布で隠したりと試行錯誤した結果、机周りには子どものアイディアで①紫のポリ袋を巻く事になった。②「お母さんが卵を見張っとかなあかん」④〇〇作りたいけど LaQ じゃ無理やから箱で作ろ②「この恐竜は草食やから木を作らな」と知識を持ち寄ったり、こだわりが出てきて恐竜の街が恐竜の世界へと広がっていった。

場面③『恐竜の指って一本長いねんで!』『ほんで前足の方が短いねんで!』(7月中旬)

◇きっかけ◇恐竜的的を作る中で、①本や図鑑をじっくり観察する事でより深く恐竜に興味を持ったようだ。どんな所に住んでいるのか何を食べているのか、泳げるのか、飛ぶ恐竜なのか等知っている事、②新たに知ったことを伝え合い遊びに取り入れる姿も見られ始めていた。廃材で作る活動もリアルになっていき、意味づけをして恐竜の街を作り上げていく子ども達の姿があった<下記写真1>「赤ちゃんがもうすぐ生まれるから割れてきてるねん。④卵の殻がパカッて半分に割れてるところ出来ない…」と廃材を使って細かい所まで自分のイメージしたものを再現しようと友達と工夫しながら作っていた。揭示する事で、②ティラノサウルスは肉食やから首長竜と一緒にしたら食べられちゃう!ここと場所分けよ! ⑦泳げる恐竜は魚を食べるはずやから、魚作るわ!と「私はこれ作る! ④これあった方がいいんじゃない?」等お互いに意見を出し合い、子どもなりの恐竜の世界が出来上がった。

これ作りたい! <写真1>

ここ持っというて!

できた!!



⑧ギザギザは画用紙でできるかな?



⑤同じ大きさのをいっぱい切っとくねん!

ほら! 生まれたみたい!

②図鑑に骨載ってたやろ? 作ってみたいひん? <写真2>



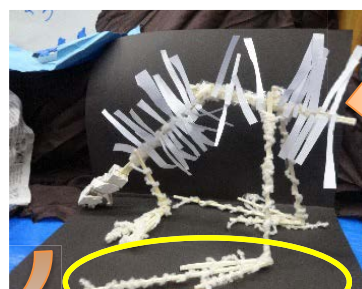
また作りたい

年中児を呼んでお披露目!

⑨「これは毛糸で巻いてるねん! ここは割りばしやで」とアピールが止まらなかった。



割りばし茶色嫌やな…恐竜の骨は白いのにな…



・割りばし
・画用紙
・セロハンテープ
・LaQ (顔の部分)

できあがり!

恐竜の足は真ん中の指が長い! そして前足の方が短いねん!



拡大



うまく出来た！

②卵を穴に入れて守ってるんやって。安心やな。

<写真2での子どもの会話>

A 児：「この骨見て！先生好きやろ？作れる？」

保育士：「どうする？黒い紙に白で描いてみる？」

A 児：「⑦立体がいい！」

B 児：「④箱じゃ太すぎて変やしな…」

C 児：「⑧割りばしや！割りばしを組み合わせにくっつける

D 児：「皆！④のりは無理！壊れた…⑥テープにする！」

と一度作り始めると「いい事考えた！」とアイディアが止まらない様子だった。



子どもの工夫

・骨の部分の画用紙を切る人”

“割りばしを恐竜の形に組み立てる人”

“顔のカーブが難しいと LaQ で顔を作る人”

“骨は白いからと割りばしの部分に白の毛糸を巻く人”に④役割を分け皆が力を合わせ形にしていく姿が見られた。

また、年中児にも声を掛け見に来てもらおうと男児が毛糸と割りばしを手に持ち「これはこの毛糸で作ってん」と“僕が考えたの聞いて！”と一生懸命伝えている姿が見られていた。「すごい！」と言ってもらえた事で自信につながり「次は〇〇サウルス作ろう！」と次への期待につながるきっかけとなった。

場面④『博物館って何がある所？』（8月下旬）

◇きっかけ◇担任が研修で行った博物館での写真を部屋に飾った事がきっかけで、『博物館みたい！』と女児が写真を見ていた。皆も興味を持つ余ようになり博物館について話を聞いて見るみる事にした。

<博物館って知ってる？どんなところ？>

骨がいっぱいある所！

暗くて広い！

動物の骨がある！

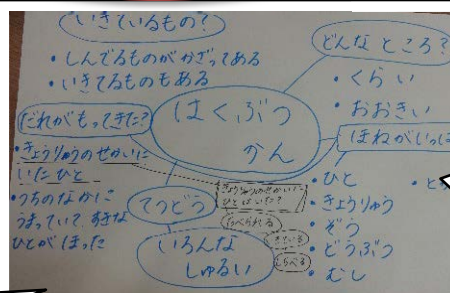
そこから出た疑問！

① <博物館は生きているものがあるの？>

死んだものがある？>

⑥生きているのもおで！

⑥死んでるやつしかアカンねん！だって博物館やもん！



②<骨は誰が持ってきた？>

⑥恐竜の世界にいた人

⑥人間は食べられるねん。恐竜が生きてて、それで死んだから、生きてた誰か運んできた。

⑥ちゃうで！死んで土に埋まって、恐竜が好きな人が掘りおこしてんで！

場面⑤『クラスを博物館みたいにするねん』

博物館について話し合い⑤「恐竜って死んでないん？首長龍がシャチになったんちゃう？似てるもん」等、
んで？一体どうなっているんだろう？と疑問がたくさん出てきた。クラスで意見を出し合い、イメージを共有し早速作ってみようと廃材や道具を持って集まっていた子ども達。初めは⑦段ボールを様々な形に組み合わせる姿があったが、小さいという事で部屋を博物館にしてみようという案がでた。



～振り返り～

4歳児の頃にも様々な経験を通し“自分たちで試してみようとする”気持ちが育ってきているからこそ、5歳児も継続して“自分たちでイメージしたものを再現し作りだしていく”事に面白さを感じ、廃材や道具を使って思いを表現している。今はまだ②聞いて知る、聞いて気づく、④やってみて気づく姿が多く見られているが、今後、一人の疑問から皆で調べたり、知っている事を共有しながら遊びを広げていく姿が見られてきている為⑦こんなことができるのでは？と新しい方法を自分達なりにたくさん見つけ、自分達でストーリーを作り出し再現していけるように環境を整えていけたらと思った。

総合的な考察

平成 29 年度の 0 歳後半では、他児の真似をして気付く姿や好奇心から面白いと自ら発見する姿が多く見られた。平成 30 年度 0 歳との比較では、後者では発見の連続で、気づきや試すというよりは、「これ、なにかな？疑問」が多く見られ、前者（平成 29 年度）では、やってみて➡変化に気づき➡新しい気づきが見られた。

平成 29 年度の 1 歳では、ままごと遊びから偶然に出た音に興味を持ち、一年を通して身近な物を使って音を出す遊びを繰り返す行うことで、やってみよう、うまくいかないこと、こうすればできる！の気づきが生まれた。平成 30 年度 1 歳では、0 歳の続きである詰込み遊びを通して、気づきを振り返った。やってみながら、聞いて知ることこうだ！と試す姿が多く見られた。音や感触、変化を楽しむよりも試す事が楽しい今、挑戦する姿が多く出たのではないかと考える。

平成 29 年度 2 歳では、1 年を通して色水や感触・ごっこ遊びを行ってきたが、その活動からお店のイメージや「なりたいお仕事ってどんな仕事？」など自分たちなりに考え、言葉を使って遊びを展開していく姿が多く見られた。平成 30 年度 2 歳では、おからの感触を楽しむ中で冷たい感覚・温かい感覚など、五感を使って気付く場面が多く見られた。

平成 29 年度 3 歳のお寿司からケーキ屋さんごっこでは、実際の食材を使ってお寿司をすることで、粘土や画用紙では味わえない感触など気付く事が出来た。また、さらにこうしたら？もっと面白いのでは？とやってみよう、試してみようとする姿が多く見られ、こうしたらもっと面白い！と新たな方法に気付く場面も多く見られた。平成 30 年度 3 歳のテントウムシでは、新たな命の誕生に出会い、育てる事の楽しさや難しさ、生き物への興味がより深まった事例であり、①～④を繰り返す中で新たな気づきが生まれ、さらに振り返りを通して共有する事や違いに気付くことができた。

平成 29 年度 4 歳の飼育からうまれた色水から氷体験で、2 歳の頃から色水遊びを繰り返し試してきた子ども達は、やってみよう、と自分なりの方法で試す姿が多く見られ、きつこうなる！こうなるのでは？と期待と失敗と繰り返しながら挑戦する姿が見られた。

平成 30 年度 5 歳では、恐竜がブームであり、飛行機の的作りから「やっぱり作るって楽しい」、「恐竜作りたいねん」とやりたい気持ちを実現していく事例であるが、4 歳の頃では気付かなかった物をイメージ通りに作り出す方法（飛ぶ恐竜や骨の作り方）など、他児と話し合っ作り出す中に気が多く見られた。

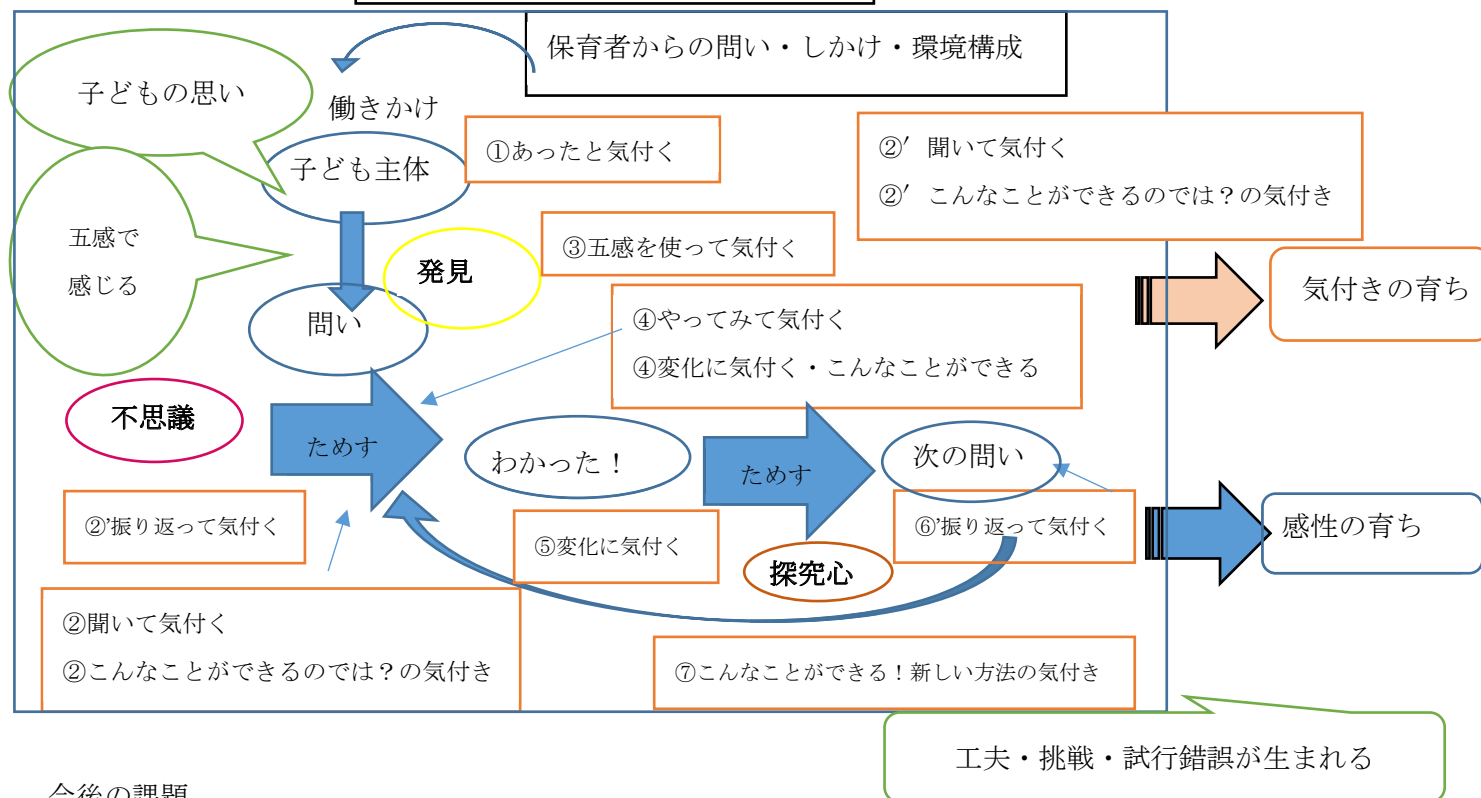
図 1. 8 つの気付きとカウント数

「④やってみて気付く」が全般的に多い

	①気付き	②気付き	③気付き	④気付き	②' 気付き	⑤気付き	⑥気付き	⑦気付き	⑥' 気付き	⑧気付き
0 歳 29	1			1						
0 歳 30	1	1	2	1		1		2		
1 歳 29	2	4	3	4		2		1		
1 歳 30	1	1		2	2			2		
2 歳 29	2	4	2	4	1			1		
2 歳 30	1		4	1	1		1		1	
3 歳 29	1	2	2	8		1	1	3	1	1
3 歳 30	3	7	9	6	3	3	2	2	3	2
4 歳 29	2	1	3	9	1	3	1	2	2	4
5 歳 30	2	9	1	10	2	3	6	7	1	6

図 2. 気付きのウェブ

①～⑧は気づきを示している



今後の課題

今回は同じ遊びでの比較でないため、また個人によるカウントであるため、妥当性は低いですが、前期・後期で比べてみると発達やどんな傾向があるかなど、理解することができた。今後は、同じ遊びだったらどうか、さらに長期にわたって遊びの継続をみていきたい。